



Weekly Market Report

Aug 17, 2020

FX, JPY Interest Rate, Topics

1. 為替相場概況

一時107円台をつけるも、売り圧力が強まり戻される展開。米ドル買いは一服か。

USD/JPY (1週間の値動き)



コメント

(出所) Bloomberg

先週末のドル円相場は105.71円から107.05円のレンジで推移。週明けは特に材料もなく、前週末に発表された良好な米雇用統計後のドル円水準を引き継ぐ形で106円前後を推移。11日にはロシアが新型コロナワクチンを世界で初めて承認したとの報道により、ワクチン開発全体への期待が高まったことで低リスク通貨である円が売られたことや、米長期金利が約1か月ぶりの高水準を付けたことから、一気に106円台後半へ。その後も米ドルの買戻しが続く中、米消費者物価指数(CPI)が予想外の上振れを示したことで起こった米国の金利高と株価高につられ、ドル円も一時107円台を回復。週末は米国小売売上が予想を下回ったことで米ドルが売戻され、106円台半ばまで下落した。先週は107円台に入ると売り圧力が強まったが、一週間を通しドル円は底堅い動きを見せた。今週は米国の追加経済対策の協議が難航していることや、米長期金利の上昇が一巡したこともあり、米ドル買いが続くことは考えづらく、106円台後半での推移となると予想する。(市場営業部/塚田)

今週の経済指標 (予定)

日付	イベント	予想
8/17(月)	(日本)第2四半期 GDP速報値(前期比)	▲7.5%
8/17(月)	(米国)NY連銀製造業景気指数	15.0
8/18(火)	(米国)住宅着工件数	124万戸
8/21(金)	(米国)マークイット米国製造業PMI	51.5
8/21(金)	(米国)中古住宅販売件数	540万戸

USD/JPY (5年間)



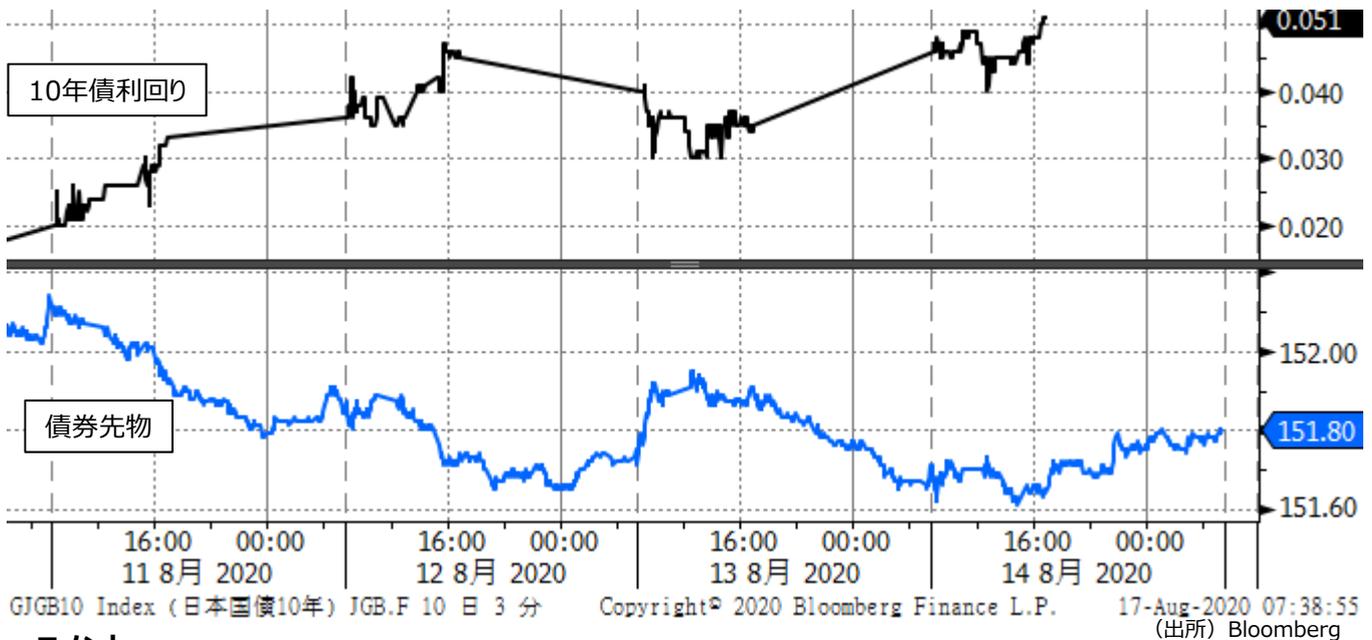
今週のレンジ予想 (USD/JPY)

予想者	今週のレンジ	予想のポイント
治久丸智文	105.00 - 108.00	FOMC議事要旨内容(19日)及びフィラデルフィア連銀製造業景気指数(20日)の結果に伴う米国債金利の動きに注目。
福永純一	105.50 - 107.50	米中通商協議や新型コロナ第二波への不透明感から引き続き上値重い展開を予想。FOMC議事録の内容に注目。

2. 円金利相場概況

長短全ゾーンにおいて金利上昇。イールドカーブはベア・スティープ化

10年国債金利と債券先物（1週間の値動き）

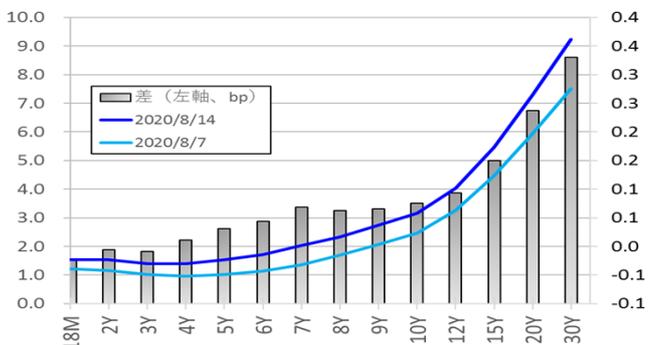


コメント

先週の円金利相場は米金利上昇に合わせて長短全ゾーンにおいて金利上昇した。前週末に公表された米雇用統計が市場予想を上回り、PPIやCPI等の米インフレ指標も強い内容となったことから、米金利は全ゾーンにおいて金利上昇。10年米国債利回りは0.5%台から0.7%台へと上昇した。これを受けて、円金利も全ゾーンにおいて金利上昇しており、10年国債利回りは0.01%付近から0.04%付近まで上昇。とりわけ超長期ゾーンにおいて金利上昇幅が大きく、イールドカーブはベア・スティープ化した。

今週は国内では18日に30年債入札、20日に5年債入札、海外では19日に米20年債入札が予定されている。米国ではコロナ禍の積極的な財政出動により国債の発行額が過去最大規模となっているが、先週実施された30年債入札はやや低調な結果となったことから、今週の20年入札の結果に注目が集まっている。低調な結果となれば、円金利にも上昇圧力が掛かるだろう。(市場営業部/浅川)

金利スワップ変化（1週間）



5年円金利スワップ推移（5年間）



今週のレンジ予想（10年国債利回り）

予想者	今週のレンジ	予想のポイント
吉岡博紀	0.02% - 0.10%	米債需給により、米金利が上昇。円金利も上昇基調にあるが、需給面を勘案すると今後の上昇余地は限定的と予想。
廣瀬友絵	0.02% - 0.08%	先行き不透明感の中、30年債と5年債の入札も続き、投資家も慎重姿勢で金利は上昇しにくい展開か。

3. 今週のトピックス

ユーロ相場アップデート

史上初となるEUによる大規模な債券の発行が実現。

ECB金融政策

ユーロ圏では、実体経済の回復スピードが緩やかにとどまるため、ECBは金融緩和を継続。2020年3月以降、新型コロナウイルス感染防止のためのロックダウンの動きが広がったことを受けて景況感は急速に悪化。4月にかけて景気は一段と落ち込んだものの、新規感染者の増加ペースが鈍化するなか、5月以降は多くの国がロックダウンを段階的に緩和したため、景気は底入れしており、【図1】で示す通り製造業PMI及びCPIともに4月～5月を底に反発している。ただし、マイナス金利政策による金融仲介機能の低下などへの懸念から、利下げは見送られ、緩和手段は資産買い入れや流動性供給が中心に。独10年債利回り【図2】は、当面、質への逃避や各国中銀の追加緩和観測を背景に、低水準での推移が続く見込み。来年にかけて、景気が回復に向かうとともに、徐々に上昇圧力が生じていく見通し。

復興基金の設立合意

EU加盟国は、7月のEU理事会での5日間に及ぶマラソン協議の結果、復興基金の設立に合意。補助金と融資の割合や各国への分配方法の一部等を修正したものの、原案の7,500億ユーロという規模を維持。史上初となるEUによる大規模な債券の発行が実現へ。ただ、復興基金の創設は2021年以降となるうえ、資金援助を受けるためには復興・強靱化計画を提出し、EU理事会の承認を受けることが必要。これらを踏まえると、実際に資金が各国に渡るのは21年4～6月期以降になるとみられるため、20年の景気回復への寄与は期待できず。当面は、将来的な財政負担やEUによる財政監視等への懸念から、南欧諸国の利用が進んでいないESMによる与信枠が活用されるかが焦点になるか。

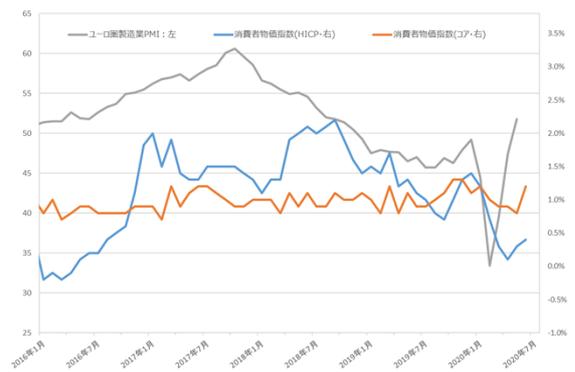
今後のユーロ相場展開

7月中、対ドルで2018年以来的の水準までユーロが上昇。米欧間での新型コロナの影響や対応を巡る違いが顕著になる状況下、以下3点から、先行きもユーロは対ドルで強含みで推移する見通し。

第1に、米国内での新型コロナの感染再拡大。ユーロ圏では、4月に感染者が急増したものの、厳しいロックダウンにより感染拡大を抑え込み、その後は着実に経済活動の再開が進展。一方、米国では6月半ば以降、新規感染者数が増加に転じ、一部の州では規制を強化。米国では、市場予想を上回る経済指標が続いてきたものの、足許で頭打ちとなるなか、欧州の景気回復期待が意識されやすい状況に。第2に、EU復興基金の合意。第3に、経常収支の格差。米国が大幅な経常収支赤字を抱えるのとは対照的に、欧州は大幅な経常収支黒字で推移しており、為替需給面からはユーロ高圧力がかかりやすい状況となっている。

(市場営業部/治久丸)

【図1】消費者物価指数と総合PMI



【図2】ユーロ主要国10年債利回り



【図3】ユーロ相場 (対ドル、対円)



(出所 Bloomberg)

ご留意事項

- ・本資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、取引の申し込みでも、取引締結の推奨でもなく、売買若しくは何らかの取引を行うことを助言したり、または勧誘したりするものではありません。
- ・本資料の内容につき、当行はその正確性及び完全性を保証するものではなく、一切の責任を負いません。ご利用に際しては、ご自身のご判断をお願いします。
- ・本資料に基づき、お客さまが投資のご判断をされた結果に基づき生じた損害・損失等については、当行は一切責任を負いません。
- ・本資料は著作物であり、著作権法により保護されております。無断で本資料の全部または一部を複製、送信、転載、譲渡および配布することはできません。
- ・本資料に掲載された各見通しは本資料作成時点での各執筆者の個人的見解に基づいており、それらは必ずしも当行の見解を反映しているとは限らず、また、予告なしに変更される場合があります。



商号：株式会社あおぞら銀行（登録金融機関 関東財務局長（登金）第8号）
加入協会：日本証券業協会、一般社団法人金融先物取引業協会、日本商品先物取引協会